

2023/09/09 日仏哲学会シンポジウム

「だらしなくふんわりと死ぬこと」：モンテーニュの理想の死とパスカル

山上浩嗣 (yamajo.hmt@osaka-u.ac.jp)

パスカルにおける死および死後の生についての思想は、モンテーニュのそれと極端な対照をなしている。パスカルは『エッセー』の著者に対して、齒に衣着せぬ批評を行っている。パスカルは、モンテーニュがキリスト教に反した死生観をもち、「だらしなくふんわりと死ぬこと mourir lâchement et mollement¹」を願っているさまに強く反発している。パスカルはここで具体的にモンテーニュのどんな考えを想定しているのだろうか。また、パスカル自身はどのような死が望ましいと考え、そのためにどのような生を送ることを勧めているのだろうか。

[01] On peut excuser ses sentiments [de Montaigne] un peu libres et voluptueux en quelques rencontres de la vie — 730, 331 — mais on ne peut excuser ses sentiments tout païens sur la mort. Car il faut renoncer à toute piété si on ne veut au moins mourir chrétiennement. Or il ne songe qu'à mourir lâchement et mollement par tout son livre. (S559-L680)

人生のさまざまな場面における彼 [=モンテーニュ] のやや放縦で享樂的な考え(730頁、331頁²)は許せるとしても、死についての彼のまったく異教的な考えについては許容できない。なぜなら、少なくともキリスト教徒にふさわしい死に方を望まないのは、あらゆる信心を放棄するに等しいからだ。それなのに彼は、その著書全体を通じて、だらしなくふんわりと死ぬことしか考えていない。

『パンセ』における死の思想の本質的な部分は、①メメント・モリ(死の想起)、②「気晴らし」、③来世への希望、に関連している。そして、この三つの主題については、まさにモンテーニュも『エッセー』のなかで言及している。本論では、これら三主題についての両者の思索を比較し、モンテーニュからパスカルへの影響関係や、後者から前者への反発について考察しよう。

¹ A. Furetière, *Dictionnaire universel*, 1690, s. v. « mollement » : « adv. D'une manière molle, douce, voluptueuse. On est couché bien mollement sur la plume, sur les roses. Cet enfant a été élevé fort mollement & délicatement. Il va bien mollement en besogne. Il a répondu au reproche, qu'on luy a fait fort mollement, & avec peu de vigueur & de fermeté. » *Ibid.*, « mol » : « MOL, se dit figurément en choses morales, de ce qui est flasque & sans vigueur, tant à l'égard du corps que de l'esprit. C'est un homme mol & effeminé, qui n'est pas capable de grande fatigue, qui n'a point de coeur ni de fermeté. On se doit deffier d'un Rapporteur qui est mol, qui ne sçait pas soutenir son avis, qui se laisse aisément entraîner par les autres. On dit aussi, la molle oisiveté. »

² この頁番号は、パスカルが使用した『エッセー』1652年版に対応している(FS, p. 1130-1131, n. 4 参照)。730頁には、「私は死にも人生の余裕と安樂さの分け前に与らせてやりたい Je veux qu'elle [la mort] ait sa part à l'aisance et commodité de ma vie」、「あらゆる苦しみから免れた死に方が見つかるかどうか試してみよう essayons un peu plus avant d'en trouver quelqu'une [des formes de mourir] deschargée de tout desplaisir」(III, 9, « De la vanité », BMM 1029-1030, VS 983-984)などの文言が、331頁には、「自由人でもたいていの者はほんのわずかな利益のために、自らの生命と存在を他人の支配に委ねる la plus part des personnes libres, abandonnent pour bien legeres commoditez [= avantages], leur vie, et leur estre à la puissance d'autrui」(II, 12, « Apologie de Raimond de Sebonde », BMM 483, VS 461)などの文言が記されている。これらの箇所は、「死についてのモンテーニュのまったく異教的な考え」に関連すると思われるが、断章 S559-L680の末尾に「その著書全体を通じて」とあるように、パスカルが念頭に置いているのはこれに限らないだろう。実際、『エッセー』には死についての思索があちこちに見られる。

1. メメント・モリ

パスカル

はじめに、「考える葦」に関する断章を手がかりに、パスカルが勧めるメメント・モリについて見よう³。「考える葦 *roseau pensant*」としての「思考 *pensée*」は、単なる思考ではなく、人間の尊厳をなす「規制 *règlement*」に適った思考である。

[02] *Roseau pensant.*

Ce n'est point de l'espace que je dois chercher ma dignité, mais c'est du règlement de ma pensée.
Je n'aurai point d'avantage en possédant des terres. Par l'espace l'univers me comprend et m'engloutit comme un point, par la pensée je le comprends. (S145-L113)

考える葦。

私が自分の尊厳を求めなければならないのは、決して空間によってではなく、私の思考の規制によってである。私は、多くの土地を所有したところでなら優位をもつことにはならない。宇宙は私を空間によって包みこみ、一点のように飲みこむ。私は宇宙を思考によって包みこむ。

人間の思考は、規制がなければどこまでも逸脱していく。規制に従った思考とは、多くの土地を所有したり人々を権力で支配したりする（これは、「肉的な者 *les charnels*⁴」の欲望にはかならない）ための方策を考えることではない。では、それはどんな思考か。

パスカルにとって人間が「気高い」のは、「自分が死ぬことを知っている」からである (S231-L200)。彼はまた、「人間の偉大さは、自分が悲惨であることを知っている点にある」 (S146-L114) とも告げている。

[03] Mais quand l'univers l'écraserait, l'homme serait encore plus noble que ce qui le tue, puisqu'il sait qu'il meurt et l'avantage que l'univers a sur lui. L'univers n'en sait rien. (S231-L200)

だが、たとえ宇宙が人間をおしつぶしたとしても、人間は彼を殺す当のものよりもずっと気高い。なぜなら彼は自分が死ぬことを知っており、宇宙が彼に対してもつ優位を知っているからだ。宇宙はそんなことをまったく知らない。

[04] La grandeur de l'homme est grande en ce qu'il se connaît misérable.

Un arbre ne se connaît pas misérable.

C'est donc être misérable que de [se] connaître misérable, mais c'est être grand que de connaître qu'on est misérable. (S146-L114)

人間の偉大さは、自分が悲惨であることを知っている点にある。

³ ここでは『パンセ』における死の思索についてのみ扱う。フェレロルは、『パンセ』における死は人間一般の死についての思索 *réflexion* であるという点でいまだ抽象的であると言う。彼は、その後信仰の深化とともに死の瞑想 *méditation sur la mort*、ついで祈り *prière* (『病の善用を神に求める祈り』*Prière pour demander à Dieu le bon usage des maladies*) に移行するさまを丁寧に描き出している。Gérard Ferreyrolles, « Mourir avec Pascal », dans *De Pascal à Bossuet. La littérature entre théologie et anthropologie*, Paris, Honoré Champion, 2020, p. 97-113.

⁴ Voir S339-L308, S761-L933.

木は自分が悲惨であるとは知らない。

つまり、自分が悲惨であると知ることは悲惨であるが、自分が悲惨であると知ることは偉大である。

「悲惨」とはおのれの命が有限であるという事実である。人間の尊厳をなす思考、人間にふさわしい思考とは、その事実を自覚すること、すなわちメメント・モリにほかならない。次は、人間がそのような務めを怠っているという認識を示している（これが後に見る「気晴らし *divertissement*」の状態である）。

[05] Les hommes n'ayant pu guérir la mort, la misère, l'ignorance, ils se sont avisés, pour se rendre heureux, de n'y point penser. (S166-L133)

人間は死、悲惨、無知をいやすことができなかつたので、幸せになるために、そんなことをまったく考えないようにした。

パスカルの勧めるメメント・モリは、単に死を念頭に置くことではなく、宗教に従って永遠の生を探求するという行為への促しである。次の一節は、パスカルが仮想的対話者として想定する不信仰者のせりふである。

[06] Comme je ne sais d'où je viens, aussi je ne sais où je vais, et je sais seulement qu'en sortant de ce monde je tombe pour jamais ou dans le néant, ou dans les mains d'un Dieu irrité, sans savoir à laquelle de ces deux conditions je dois être éternellement en partage. Voilà mon état, plein de faiblesse et d'incertitude. Et de tout cela je conclus que je dois donc passer tous les jours de ma vie sans songer à chercher ce qui doit m'arriver. [...] Et après, en traitant avec mépris ceux qui se travailleront de ce soin, je veux aller sans prévoyance et sans crainte tenter un si grand événement, et me laisser mollement conduire à la mort, dans l'incertitude de l'éternité de ma condition future. (S681-L427, p. 1221-1222)

私は、自分がどこから来たのかも、どこに行くのかも知らない。私が知っているのはただ、この世を離れば、永遠に無のなかに落ちてしまうか、永遠に怒れる神の手のなかに抱かれるかのいずれかだということだけである。だが、この二つの状態のうちのいずれが自分に与えられるのかは知らない。これが私の、きわめて無力で不安定な現状である。このことから、私はこう結論する。生涯のすべての日々を、やがて自分の身に何が起こるかなど考えずに過ごすことだと。[...] しかるのちに、このような心配で頭を悩ませている連中を鼻で笑ってやりながら⁵、何の予測も何の恐れもなく、あの大事件に挑んでみたい。そして、未来の永遠の状態がどんなものかについてはよくわからないままで、ふんわりと死まで運ばれてみたいものだ。

これを受けてパスカルは、「こんなふうに語る者と、誰が友だちになりたいと考えるだろうか *Qui souhaiterait d'avoir pour ami un homme qui discourt de cette manière ?*」(S681-L427, p. 1222) と憤る。それは、この対話者が、やがて死んでしまうというみずからの置かれた悲惨な状態を知りながら、それに目をつぶって「ふんわりと *mollement*」死を迎えると宣言しているからにほかならない。この人物は、人間の尊厳としての「思考」の義務を怠り、生涯を「気晴ら

⁵ モンテーニュの態度を示唆していると推測できる。引用 15 参照。

し」に捧げているのである。なお、「ふんわりと死まで運ばれる *me laisser mollement conduire à la mort*」という表現は、パスカルがモンテーニュの理想の死に方を批判する際に用いた用いた表現「だらしなくふんわりと死ぬこと *mourir lâchement et mollement*」(S559-L680)を想起させずにはおかない。この不信仰者のモデルがモンテーニュであることは明らかである。

パスカルにとって「規制された思考」とは、ちょうどこの対話者が放棄しようとしていることだ。それは、肉体の死後に自分はまったくの無に帰すのか、それとも神から永遠の生命を与えられるのかという問いについて考えることである。言いかえれば、「考える葦」としての人間の「尊厳」とは、死後に魂の永遠の生を与えられるためにはどのようにこの地上の生を生きるべきかを考えることである。

モンテーニュ

モンテーニュは『エッセー』の「哲学するとは死ぬことを学ぶこと」と題された章で、人間の知恵の究極の目的が「死をまったく恐れないようになること」であるとするソクラテスやキケロの考えを受け継いでいる。その上で彼は、死を恐れなくなるために「何よりも頻繁に死を念頭に置く」こと、すなわちメメント・モリを勧める。

[07] Ils vont, ils viennent, ils trottent, ils dansent, de mort nulles nouvelles. Tout cela est beau : mais aussi quand elle arrive, ou à eux ou à leurs femmes, enfans et amis, les surprenant en desordre [VS : en dessoude] et au descouvert, quels tourmens, quels cris, quelle rage et quel desespoir les accable ? [...] Il y faut prouvoir de meilleure heure [...]. [...] Ostons luy l'estrangeté [à cet ennemi (= la mort)], pratiquons le, accoustumons le, n'ayons rien si souvent en la teste que la mort [...]. (I, 19/I, 20, « Que philosopher c'est apprendre à mourir », BMM 88, VS 86)

誰もが行ったり来たり、駆け回ったり踊ったりして、死についてはまったく耳を塞いでいる。おめでたいことだ。だが、死が自分自身に、自分の妻、子ども、友人に、不意に、いかなる抵抗もできないままに襲いかかってきたときには、どれほどの苦悩、叫び、悔恨、絶望に苛まれることだろうか。[...] 死に対しては、もっと早くから備えておかなければならない。[...] その敵からよそよそしさを取り除き、それと親しくつきあい、慣れよう。何よりも頻繁に死を念頭に置こう。

上で語られるメメント・モリの目的は、死がいよいよ自分や近親者に迫ったときの苦悩や絶望を緩和することにとどまる。パスカルのように、肉体の死後の自己の命運はまったく意識されていない。モンテーニュはまた、次のように述べる。

[08] Or des principaux bienfaits de la vertu, c'est le mespris de la mort, moyen qui fournit nostre vie d'une molle tranquillité, et nous en donne le goust pur et amiable : sans qui toute autre volupté est esteinte. (I, 19/I, 20, BMM 84, VS 82)

ところで、徳の主な恩恵は死の軽視である。それは人生に柔らかい平穏をもたらし、人生に純粹で快い味わいを与えてくれる手段であって、それがなければ、他のあらゆる快樂がなくなってしまうだろう。

ここでの「徳」は哲学者の探求の対象であり、具体的にはメメント・モリを通じた魂の鍛練のことである。モンテーニュは、その恩恵が「死の軽視」であり、そのことによって、われわれの人生に「柔らかな平穏」がもたらされるという。彼にとって、いかにメメント・モリが厳

しい鍛練であったとしても、その鍛練の結果この世を平穩に過ごすことができる。苦行の成果は精神的な逸樂であるということだ⁶。彼にとって、死に備えることは、現世の幸福の獲得の手段にほかならない。

[09] Il n'y a rien de mal *en la vie*, pour celui qui a bien compris, que la privation de la vie n'est pas mal. (I, 19/I, 20, *BMM* 88, *VS* 87)

命を失うことが不幸ではないと悟った者には、生涯にいかなる不幸もない。

少なくともこのときモンテーニュは、パスカルと異なり、死後の自分の命運を問題にしていない。彼はここで、肉体の死は自分の存在を決定的に無に帰すと考えているようだ。「哲学するとは死ぬことを学ぶこと」の章の末尾で、モンテーニュは「自然」を擬人化し、人間を相手に、説教を行わせている。その弁論に含まれるルクレティウスからの多数の引用のなかの一節だけを記しておこう。

[10] *licet, quod vis, vivendo vincere secla,*

*Mors aeterna tamen nihilominus illa manebit*⁷. [Lucrece, III, 1090-1091]

(I, 19/I, 20, *BMM* 96, *VS* 94)

たとえ好きなように生きて、数世紀を勝ちとることができたとしても、永遠の死が待っていることに変わりはない。

この「自然」は、人間の死後の救済とは無縁であり、キリスト教の神とは明白に対立する原理を体現している⁸。

2. 気晴らし

パスカル

次に、パスカルの「気晴らし」概念の要点を見よう。

パスカルは「気晴らし」という語を、苦悩や苦勞から心理的に距離をとらせる手段や活動という一般的な意味から、おのれの死すべき運命から目をそらせる活動という特殊な意味へと転化させている。パスカルにとって、人間はみな全生涯を、後者の意味での「気晴らし」に

⁶ 逸樂のための苦行という発想には明らかに矛盾がある。実際、彼はのちに、メメント・モリを勧める哲学的知恵を放棄し、「現在の不幸に対する耐性と不吉な未来の出来事に対する本源的な無頓着」をもたらす「民衆の愚かさや不安のなさ」を讃えるようになる (« Est-ce pas ce que nous disons, que la stupidité, et faute d'apprehension, du vulgaire, luy donne ceste patience aux maux presens, et ceste profonde nonchalance des sinistres accidens futurs ? » [III, 12, « De la physionomie », *BMM* 1099, *VS* 1052])。

⁷ 仏訳 : « Tu as beau vaincre les siècles en vivant ce que tu veux, la mort est éternelle et n'en restera pas moins telle. » Voir : « Sortez, dit-elle [= nature], de ce monde, comme vous y estes entrez. Le mesme passage que vous fistes de la mort à la vie, sans passion et sans frayeur, refaites le de la vie à la mort. Vostre mort est une des pieces de l'ordre de l'univers, c'est une piece de la vie du monde [...]. Changeray-je pas pour vous cette belle contexture des choses ? C'est la condition de vostre creation ; c'est une partie de vous que la mort : vous vous fuyez vous mesmes. [...] Le premier jour de vostre naissance vous achemine à mourir comme à vivre [...] » (I, 19/I, 20, *BMM* 94, *VS* 92-93)

⁸ モンテーニュの死についての思想とキリスト教（とくに救済、来世）との関係について、次を参照。Hugo Friedrich, *Montaigne*, Paris, Gallimard, « Tel », p. 302-311.

費やしている⁹。彼はこの「気晴らし」を、人間の悲惨の根源とみなしている。

[11] La seule chose qui nous console de nos misères est le divertissement, et cependant c'est la plus grande de nos misères. Car c'est cela qui nous empêche principalement de songer à nous, et qui nous fait perdre insensiblement. (S33-L414)

われわれの悲惨を和らげてくれる唯一のものは気晴らしである。しかしそれこそがわれわれの悲惨の最たるものである。なぜならこれこそが、われわれが自分について考えることを妨げ、われわれを知らず知らずのうちに滅ぼしてしまうからだ。

パスカルはその上で、この活動そのものがいかに倒錯的であることを示すのに、いくつかの理由を挙げる (S168-L136)。本論で注目すべきは、次の二つである。

第一に、気晴らしにおいて、その手段と目的とが転倒してしまっているという点である。われわれはさまざまな活動を、なんらかの目的をもって行っている。それを達成するための努力や苦勞の先に幸福が待っていると思いこんでいる。にもかかわらず、そのような未来の幸福を保証している対象がいますぐ無条件で与えられることを望まない。「人は獲物よりも狩りを好む *on aime mieux la chasse que la prise*」 (S168-L136, p. 906)。

[12] De là vient que le jeu et la conversation des femmes, la guerre, les grands emplois sont si recherchés. Ce n'est pas qu'il y ait en effet du bonheur, ni qu'on s'imagine que la vraie béatitude soit d'avoir l'argent qu'on peut gagner au jeu ou dans le lièvre qu'on court, on n'en voudrait pas s'il était offert. Ce n'est pas cet usage mol et paisible et qui nous laisse penser à notre malheureuse condition qu'on recherche ni les dangers de la guerre ni la peine des emplois, mais c'est le tracass qui nous détourne d'y penser et nous divertit. – Raison pourquoi on aime mieux la chasse que la prise. (S168-L136, p. 906)

このことから、賭けごと、女性との会話、戦争や重職があればほど求められるようになる。そこに実際に幸せがあるからというわけでもなければ、真の至福が賭けごとで得られる金や、狩りで得られる兎をもつことにあると人々が思い込んでいるからというわけでもない。そんなものは、やると言われてももらわないのだから。人が求めているのは、われわれを自分の不幸な状態について考えるままにしておく、そんなに生ぬるい、おだやかな所有の仕方でもなければ、戦争の危険や、職務上の苦勞でもない。求められているのは、不幸な状態からわれわれの考えをそらせ、われわれの気をまぎらわせてくれる騒ぎなのである。そういうわけで、人は獲物よりも狩りを好む。

⁹ モンテーニュも死から気をそらせる態度に言及しているが、それはあくまでも *diversion* の一例として語られるのみであり、その態度を一般化して *diversion* と呼んでいるわけではない。パスカルの「気晴らし *divertissement*」と、モンテーニュが章題として用いている *diversion* という語はそれぞれ « *Action de détourner de ce qui occupe* », « *Action qui détourne qqn de ce qui le préoccupe, le chagrine, l'ennuie* » という意味であり (*Dictionnaire Le Petit Robert*)、ほぼ同義語である。ただし、J・メナールによれば、17世紀においてはすでに、*divertissement* は、「気をそらせる」という意味で用いられることはなくなっていたという (たしかに、1690年刊のフルティエールの辞書は、*divertissement* の語義として、「娯楽、楽しみ、息抜き *réjouissance, plaisir, recreation*」しか記していない)。パスカルはこの語の使用に際して明らかにモンテーニュの *diversion* の語の用法から影響を受けている。Voir Jean Mesnard, « De la 'diversion' au 'divertissement' », dans *La Culture du XVII^e siècle. Enquêtes et synthèses*, Paris, PUF, 1992, p. 68.

パスカルによればそれは、獲物そのものは、忍び寄る死からわれわれの目をそらすことができないからだ。気晴らしにおいて真に求められているのは、目的ではなく手段、未来の幸福ではなく現在の楽しみである。

気晴らしが倒錯的である第二の理由は、それが人間を「騒ぎ」のはてしない連続に追いやる点にある。人は、いま取り組んでいる活動の目的が果たせたら、「休息」が待っていると信じこんでいる。だが実際は、その活動自体が真の目的であったために、それを終えてしまうと、「倦怠」にとらわれ、また別の「騒ぎ」を求めなければならなくなる。

[13] [...] on cherche le repos en combattant quelques obstacles. Et si on les a surmontés, le repos devient insupportable par l'ennui qu'il engendre. Il en faut sortir et mendier le tumulte. (S168-L136, p. 907)

[...] 人はさまざまな障害と闘いながら休息を求める。だが障害を乗り越えたとたんに、休息は、それが生み出す倦怠によって耐えがたくなってしまふ。休息から抜け出して、騒ぎを求めなければならなくなるのだ。

このような循環を生み出しているのは、人間の「欲望の満たされない性質 *la nature insatiable de la cupidité*」(S168-L136, p. 907) である。広い家に住む者がより豪華な屋敷を望み、恵まれた地位にある者がさらに上の役職を目指すというように、欲望は満たされるとまた別のより獲得が困難な対象を求め、そのつど肥大化する。それにつれて「騒ぎ」、つまり苦労もまた大きくなっていく。気晴らしにおける真の目的はそのような「騒ぎ」にほかならない。さらに、仮にその(見かけの)目的が叶えられたとして、その瞬間、人は倦怠に襲われて不幸になる。気晴らしにおいて、実のところ、現在にも未来にも幸福はないのである。

モンテーニュ

パスカルによる上記の考察は、モンテーニュの思考ときわめて明瞭な対照をなしている。

まず、モンテーニュにとって「気をそらせること」は、批判ではなく推奨される営為である。彼はとりわけ、「ひそかに話題の向きを変え *declinant tout mollement noz propos*」することで、ある知人女性の悲しみを治癒させたという (III, 4, *BMM* 872, *VS* 831)。ただし彼は、この方策が一時しのぎであって、根本的な治療法になりえないことを自覚して、「私は彼女の病根に斧を入れたわけではない *je n'avois pas porté la coignée aux racines*」と断っている (III, 4, *BMM* 873, *VS* 831)。彼はまた、自身の経験についても記している。親友ラ・ボエシを失った悲しみを「まぎらすために強烈な気分転換が必要だったので、わざと、努めて恋をあさった *Ayant besoing d'une vehemente diversion pour m'en distraire, je me fis par art amoureux et par estude*」(III, 4, *BMM* 877, *VS* 835) という経験である。ここでも、「気分転換」は根本的な解決策ではなく、悲しみをしばし和らげるための実践的な策略、自分を「ごまかす *ruser*」手段である。そのような欺瞞が持続することはない。モンテーニュはそれでも、このような非力な策の有用性を強調しているのである。

次に、モンテーニュは、III, 9「空しさについて」のなかで、定めた目標に向かって邁進する姿勢よりも、定まった目的のない行為を楽しむ姿勢を尊重している。

[14] [...] je ne l'entreprends [un si long chemin], ny pour en revenir, ny pour le parfaire. J'entreprends seulement de me branler, pendant que le branle me plaist, et me proumeine pour me proumener.

Ceux qui courent un benefice, ou un lievre, ne courent pas. Ceux là courent, qui courent aux barres, et pour exercer leur course. (III, 9, *BMM* 1023, *VS* 977)

[...] 私が旅行を企てるのは、旅先から帰ってくるためでもなければ、やりとげるためでもない。動くこと (le branle) が楽しい間、動くためである。つまり私は、歩き回るために歩き回るのである。利益やウサギを求めて走る者は、走っているとは言えない。陣取り遊びや競走のために走る者こそが、本当に走っているのである。

ここでは「動き」が自己目的化している。旅の目的は特定の土地に到着することではなく、その過程を楽しむことである¹⁰。パスカルの「人は獲物よりも狩りを好む」という観察は、モンテーニュの「利益やウサギを求めて走る者は、走っているとは言えない」（走りそのものを楽しむ者が真に走る者である）という見解を追認しているのではない。モンテーニュは目的のない行為に没頭する人間の性向を歓迎し¹¹、パスカルはそこに空しさを認めているのである。

もうひとつ、III, 4「気をそらせることについて」のなかで、パスカルの考えと極端な対照をなす箇所を指摘しておく。

[15] Ces pauvres gens qu'on void sur l'eschaffaut, remplis d'une ardente devotion, y occupants tous leurs sens autant qu'ils peuvent : les aureilles aux instructions qu'on leur donne ; les yeux et les mains tendues au ciel : la voix à des prieres hautes, avec une esmotion aspre et continuelle, font certes chose louable et convenable à une telle necessité. On les doibt louer de religion : mais non proprement de constance. Ils fuyent la lutte : ils destournent de la mort leur consideration : comme on amuse les enfans pendant qu'on leur veut donner le coup de lancette. (III, 4, *BMM* 874-875, *VS* 833)

火刑台に載せられ、熱烈な信心に満たされ、あらん限りの感覚を信仰に注ぎこんでいる哀れな人々、教えに耳を傾け、視線と両手を天高く向け、激しく途切れることのない情熱にとらわれ、高らかに祈りを唱える人々は、たしかにこの状況にふさわしい称賛すべき行いをしている。彼らの信心を讃えなければならない。だが、不屈さを讃えるわけにはいかない。彼らは死との闘いを避け、死から考えをそらせている。あたかも子どもに治療用のメスを刺すときに笑わせようとするようなものだ。

モンテーニュは、信仰を理由に処刑されようとする者が、殉教により死後に救済されることを信じてひたすら祈りを唱えるさまを、「死から考えをそらせている ils détournent de la mort leur considération」とみなしている¹²。ここで彼は、そのような篤信の人々を外科治療の際に恐

¹⁰ モンテーニュは、学問についても同じようなことを言っている。彼は記憶のための勉強、知識を増やすための読書、金儲けのための勉強を批判し (I, 24/I, 25, « Du pedantisme », *BMM* 141, *VS* 136 ; I, 25/I, 26, « De l'institution des enfans », *BMM* 155, *VS* 150)、野放図な読書 (旅に書物を携帯するが、読まずにいることもよくある) (III, 3, « De trois commerces », *BMM* 869, *VS* 827-828)、楽しみのための学問 (III, 3, *BMM* 871, *VS* 829) を奨励しているのである。

¹¹ Voir : « Qui n'a jouissance, qu'en la jouissance : qui ne gaigne que du haut point : qui n'ayme la chasse qu'en la prise : il ne luy appartient pas de se mesler à nostre escole. » (III, 5, « Sur des vers de Virgile », *BMM* 924, *VS* 881) ; « Il ne faut pas trouver estrange, si gens desesperes de la prise n'ont pas laissé d'avoir plaisir à la chasse [...]. [...] Tout ainsi qu'en toute pasture il y a le plaisir souvent seul, et tout ce que nous prenons, qui est plaisant, n'est pas tousjours nutritif ou sain. Pareillement, ce que nostre esprit tire de la science, ne laisse pas d'estre voluptueux, encore qu'il ne soit ny alimentant ny salutaire. » (II, 12, *BMM* 538-539, *VS* 510-511).

¹² Cf. « Nous pensons tousjours ailleurs : l'esperance d'une meilleure vie nous arreste et appuye : ou l'esperance de la valeur de nos enfans : ou la gloire future de nostre nom : ou la fuitte des maux de cette vie : ou la vengeance

怖や苦痛から気をそらせるために騙される幼児になぞらえ、彼らに軽微な揶揄を向けている¹³。モンテーニュは、現世の敬虔な行いの結果として来世の永遠の生が与えられるという考えには与しないのである¹⁴。

3. 来世への希望

パスカル

これまで見てきたように、パスカルにとって人間の尊厳はおのれの死すべき運命を直視し、肉体の死後に魂の永遠の生を与えられるように宗教の教えに即した生を実現することにある。彼はそのような探求を行う存在をこそ「考える葦」と呼んでいる。ここでの「思考」（考えること）は単に精神を働かせることではなく、身体と心を含めた人間の全存在による信仰の行為のことである。そのような実践を妨げる行いはすべて「気晴らし」にすぎない。「気晴らし」とは、永遠の至福ではなく、肉体の死とともに無に帰す空しい幸福（富、権力、名誉）をみざす活動である。次の一節は、「気晴らし」の生涯の悲惨な末路を端的に伝えている。

[16] Il ne faut pas avoir l'âme fort élevée pour comprendre qu'il n'y a point ici de satisfaction véritable et solide, que tous nos plaisirs ne sont que vanité, que nos maux sont infinis, et qu'enfin la mort, qui nous menace à chaque instant, doit infailliblement nous mettre dans peu d'années dans l'horrible nécessité d'être éternellement ou anéantis, ou malheureux.

Il n'y a rien de plus réel que cela, ni de plus terrible. Faisons tant que nous voudrions les braves : voilà la fin qui attend la plus belle vie du monde. (S681-L427, p. 1220)

次のことを理解するのに、それほど崇高な魂は必要としないだろう。すなわち、この世に真実で確実な満足などなく、われわれの楽しみはすべてうつろなものであり、われわれの不幸は無限であるということ。そして、一瞬ごとにわれわれに迫ってくる死が、まちが

qui menace ceux qui nous causent la mort [...]. » (III, 4, *BMM* 875-876, *VS* 834).

¹³ モンテーニュは次の一節で、指導者に自身の生命を「きわめて敬虔に *tresreligieusement*」委ねるような生き方をキリスト教の殉教者の生き方と類似のものとみなし、それを批判しているようだ。パスカルは S559-L680 のなかで『エッセー』のこの箇所該当する頁番号（1652 年版の 331 頁）を記し、この記述がモンテーニュの「死についてのまったく異教的な考え」を示す例であることを示唆している。« Et la plus part des personnes libres, abandonnent pour bien legeres commoditez, leur vie, et leur estre à la puissance d'autrui. Les femmes et concubines des Thraces plaident à qui sera choisie pour estre tuée au tombeau de son mary. Les tyrans ont-ils jamais failly de trouver assez d'hommes vouez à leur devotion : aucuns d'eux adjoustans davantage cette necessité de les accompagner à la mort, comme en la vie ? Des armées entieres se sont ainsin obligées à leurs Capitaines. La formule du serment en cette rude escole des escrimeurs à outrance, portoit ces promesses : Nous jurons de nous laisser enchaîner, brusler, battre, et tuer de glaive, et souffrir tout ce que les gladiateurs legitimes souffrent de leur maistre ; engageant *tresreligieusement* et le corps et l'ame à son service [...]. » (II, 12, *BMM* 483, *VS* 461).

¹⁴ モンテーニュは次で、現世の生活と来世の救済との間の因果関係を全否定している。« En outre, c'est icy chez nous, et non ailleurs, que doivent estre considérées les forces et les effects de l'ame [...] : Ce seroit injustice de luy avoir retranché ses moyens et ses puissances, de l'avoir desarmée, pour du temps de sa captivité et de sa prison, de sa foiblesse et maladie, du temps où elle auroit esté forcée et contrainte, tirer le jugement et une condamnation de durée infinie et perpetuelle : et de s'arrester à la consideration d'un temps si court, qui est à l'avanture d'une ou de deux heures, ou, au pis aller, d'un siecle (qui n'a non plus de proportion à l'infinité qu'un instant) pour de ce moment d'intervalle, ordonner et establir definitivement de tout son estre. Ce seroit une disproportion inique, de tirer une recompense eternelle en consequence d'une si courte vie. » (II, 12, *BMM* 580-581, *VS* 549).

いなくほんのわずかな年月ののちに、われわれを永遠の無か永遠の不幸という冷厳なる必然へと陥れるということである。

これほど本当で、恐ろしいことはない。せいぜい強がっていればよい。この世でもっとも美しい生涯ですら、この結末を逃れられない。

これに続けてパスカルは、かなり意表を突く主張を行う。

[17] Qu'on fasse réflexion là-dessus, et qu'on dise ensuite s'il n'est pas indubitable qu'il n'y a de bien en cette vie qu'en l'espérance d'une autre vie, qu'on n'est heureux qu'à mesure qu'on s'en approche, et que, comme il n'y aura plus de malheur pour ceux qui avaient une entière assurance de l'éternité, il n'y a point aussi de bonheur pour ceux qui n'en n'ont aucune lumière ! (S681-L427, p. 1220)

これについてよく考えた上で、次のことにはたして疑う余地があるかどうかを答えてほしい。すなわち、この世においては来世を望むこと (l'espérance d'une autre vie) 以外に幸福はなく、人はそれに近づくにしたがってのみ幸福であること、そして、その永遠について完全な確信をもっている者にとってはもはや何の不幸も存在しないのと同様に、それについていかなる光ももたぬ者にとっては幸福などまったく存在しないということだ。

この世の真の幸福は、来世を「望むこと」だという。「来世」とは魂の至福の生のことである。肉体をとまなうこの世の生において純粹に靈的な幸福を味わうことはできないし、そもそも魂が不死でありうるかどうかさえも不可知である。ましてや自分が来世の生に与えるかどうかなど知りようがない。パスカルはその上で、それを「望むこと」、それに「近づく」ことが、現世における真の、そして唯一の幸福だと言うのである。しかも、次に見られるように、この状態は、来世の存在についての「疑い」を排除するものではない。

[18] C'est donc assurément un grand mal que d'être dans ce doute. Mais c'est au moins un devoir indispensable de chercher, quand on est dans ce doute. (S681-L427, p. 1220)

この疑いのなかにあることは、たしかに大きな不幸である。しかし、この疑いのなかにあるときに、最低限不可欠の義務は、探求するということである。

思えば、疑いの状態にありながらも来世の存在の可能性を探求すること、それが真実であった場合に備えて日々を送ること、これはまさに、パスカルが提示するゲームに参加し、「神あり」に賭けるという行為そのものではないか。パスカルの「賭け」は、おのれの一生を参加料 *mise* とする。「神あり」を選んだ場合、生涯を通じて聖書と教会の教えを学び、神から死後に救済を与えられるようにたえず努力を重ねなければならない。彼は、そのような営為を、この世の最大の幸福だと確言している¹⁵。

¹⁵ 次も参照。« L'espérance que les chrétiens ont de posséder un bien infini est mêlée de jouissance effective aussi bien que de crainte. Car ce n'est pas comme ceux qui espéreraient un royaume dont ils n'auraient rien, étant sujets, mais ils espèrent la sainteté, l'exemption d'injustice ; et ils en ont quelque chose. » (S746-L917).

また、『罪人の回心について』の次の一節は、信仰の初期段階にある者が、「見えないものに対する希望 *espérance*」と「見えるものの現存 *présence*」の間で葛藤していることを示している。« Mais elle [=l'âme] trouve encore plus d'amertume dans les exercices de piété que dans les vanités du monde. D'une part, la présence des objets visibles la touche plus que l'espérance des invisibles, et de l'autre, la solidité des invisibles la touche plus que la vanité des visibles. » (*Écrit sur la conversion du pécheur*, MES, IV, p. 40).

なお、来世への「希望」が現世における幸福をもたらすという考えは、アウグスティヌスも『神の国』で記している。ここで詳しく検討している時間はないが、内容の類似から、この一節は、パスカルの発想源である可能性が高いと思われる¹⁶。

[19] Quam ob rem summum bonum civitatis Dei cum sit pax aeterna atque perfecta, non per quam mortales transeant nascendo atque moriendo, sed in qua immortales maneat nihil adversi omnino patiundo : quis est qui illam vitam vel beatissimam neget vel in eius comparatione istam, quae hic agitur, quantislibet animi et corporis externarumque rerum bonis plena sit, non miserrimam iudicet ? Quam tamen quicumque sic habet ut eius usum referat ad illius finem, quam diligit ardentissime ac fidelissime sperat, non absurde dici etiam nunc beatus potest, spe illa potius quam re ista. Res ista vero sine spe illa beatitudo falsa et magna miseria est ; non enim veris animi bonis utitur, quoniam non est vera sapientia, quae intentionem suam in his, quae prudenter discernit, gerit fortiter, cohibet temperanter iusteque distribuit, non ad illum dirigit finem, ubi erit Deus omnia in omnibus, aeternitate certa et pace perfecta. (Saint Augustin, *La Cité de Dieu*, Livres XIX-XXII, Bibliothèque augustinienne, 37, Paris, Desclée de Brouwer, 1960, XIX, 20, p. 136-138)

それで、神の国の最高善は、永遠で完全な平和であるので、死すべき人間が出生から死へと通過するような平和ではなく、もはやいかなる敵対者を耐える必要もなく不死なる者としてそこにおいて存続する平和なのである。これが最高の至福の生であることをだれが否定するであろうか。また、その生と比較するなら、この世における現実の生は、それがどれほど魂と身体や外的事物の善に満たされていようとも、まったく悲惨であるとだれが判断しないであろうか。

しかしながら、もしもだれかがこの世における現在の生を、この上もなく熱心に、かつまったき確信をもって愛するかの生を目的としてそれへと関係づけて用いるようであれば、その人は現実においてよりもむしろ未来の希望においていまなお幸福であると正当にいうるのであろう。それにたいして、その希望のない現実の生は虚偽の幸福であり、大きな悲惨である。というのは、この生は精神の真実の善を用いていないからである。なぜなら、知恵が真の知恵であるのは、聡明な判別をはたらかせ、勇気をもってことをなし、節度をもって自己抑制をおこない、公正に分配をおこなうために、その意図をかの生の目的へ向けているばあいのみだからであって、まさにその生において、確かな永遠性と完全な平和によって神はすべてにおいてすべてであられるであろう。(アウグスティヌス『神の国』(五)服部英次郎・藤本雄三訳、岩波文庫、1991年、XIX, 20, 85-86頁¹⁷)

¹⁶ 管見の限り、フィリップ・セリエはこの一致を指摘していない。

¹⁷ « Ainsi donc, le souverain bien de la cité de Dieu étant la paix éternelle et parfaite, non cette paix que traversent les mortels, de la naissance au trépas, mais celle où sont établis les immortels à l'abri de toute adversité, qui refuserait d'admettre qu'une telle vie soit parfaitement heureuse ; et en comparaison avec elle, qui n'estimerait très malheureuse la vie d'ici-bas, si remplie soit-elle des plus grands biens de l'âme et du corps et de la fortune ? Et pourtant, celui qui possède cette vie de manière à en rapporter l'usage à celle qu'il aime du plus grand amour et qu'il attend de la plus ferme espérance, on peut dès maintenant, non sans raison, le dire heureux, mais par l'espérance de l'au-delà plutôt que par l'expérience d'ici-bas (spe illa potius quam re ista). Car l'expérience d'ici-bas qui exclurait l'espérance de l'au-delà n'est que fausse béatitude et grande misère : elle ne dispose pas des vrais biens de l'âme, car elle n'est pas la vraie sagesse, celle qui dans les biens d'ici-bas, qu'elle discerne avec prudence, gère avec fermeté, emploie avec tempérance et distribue avec justice, ne dirige pas son intention vers le bien suprême où Dieu sera tout en tous dans une éternité assurée et une paix parfaite. » (Saint Augustin, *La Cité de Dieu*, Livres XIX-XXII, Bibliothèque augustinienne, 37, Paris, Desclée de Brouwer, 1960, XIX, 20, p. 137-139)

実のところ、パスカルがこの賭けへの参加を促すのは、勝ったときに与えられる配当の大きさ（「無限に幸福な無限の生」*« une infinité de vie infiniment heureuse »* [S680-L418, p. 1213]）が理由ではない。いくら得られるかもしれない利益が大きくても、そのためにこの世の生涯全体を差し出す賭博には簡単には乗れないからだ。そこでパスカルは、賭けの利益を別の言葉で説明する。

[20] *Je vous dis que vous y gagnerez en cette vie, et qu'à chaque pas que vous ferez dans ce chemin, vous verrez tant de certitude de gain, et tant de néant de ce que vous hasardez, que vous connaîtrez à la fin que vous avez parié pour une chose certaine, infinie, pour laquelle vous n'avez rien donné.* (S680-L418, p. 1215)

言っておくが、君はこの世にいる間にその賭けに勝つだろう。そして、君がこの道で一步を踏み出すごとに、勝利が確実であることと、賭けたものが無に等しいこととはっきりと悟るあまり、ついには、君は確実かつ無限なものに賭けたのであって、そのために何も手放さなかったのだということを知るだろう。

この賭けにおいて、結果を知る前に参加者は勝利を確信し、すでに約束の配当を得たも同然の状態になる、と読める。なぜか。それは、引用 17 に即して言えば、参加者は探求の段階で来世への「希望」を得ているからであり、その希望は、おのれの探求の正当性への「疑い」を徐々に小さくしていくからだ。「神あり」を選んだ者は、「気晴らし」の生を避け、あたかも神から見て正しい行いに日々努めるうちに、来世への希望をますます堅固なものとしていく。パスカルは、そのような生涯こそが、神なしを選ぶ生涯よりも幸福であると言いたいのである。

このように見ると、「賭け」は、見かけに反して、未来の目標のために現在を犠牲にする行いではない。来るべき至福に対する「希望」そのものが現在を充実させ、生きるに値する

ここで注目すべきは、次の三点である。第一に、神の国すなわち来世における最高善たる平和 *pax* は、われわれがこの世で経験する平和とはまったく異なるという点。後者は「出生から死へと通過するような平和」すなわち、身体の成長や衰退に左右される不安定で一時的な平和であるのに対し、前者は不変不動で永遠に持続する純然たる魂の平安である。そのような完全無欠な幸福はこの世において享受するのは不可能である。

第二は、それでも、現世の生を来世の生の「目的として関連づけて用い」れば、「現実においてよりもむしろ未来の希望において (*spe illa potius quam re ista*) いまなお幸福」 (*on peut dès maintenant, non sans raison, le dire heureux, mais par l'espérance de l'au-delà plutôt que par l'expérience d'ici-bas*) であるという点である。現世において来世の幸福に与ることはできないが、後者の獲得の手段として現世の生を位置づけるなら、すなわち、現世において、来世の生が授けられるにふさわしい生涯を送るなら、その者はそれによって得られる「来世への希望」によってすでに幸福であるという。ここでアウグスティヌスが「希望 *spes*」と「現実 *res*」（フランス語では「経験」*expérience*）とを対置していることにも注意しよう。「希望」は現実ではないあくまでも想念の産物、言いかえれば、身体や感覚によって知覚される善ではなく、「精神（あるいは魂）の善」であるということだ。つまり、「希望」は来世で得られる善と質的に近似している。あえて言えば、「希望」は来世の幸福の先取りなのである。

そして、上の引用で注目すべき第三点は、「その希望のない現実の生は虚偽の幸福である」という点だ。この世の生における唯一の「精神の善」が「希望」であるため、これを欠く生涯において経験できるのは、虚偽の幸福である「身体や外的事物の善」（*biens du corps et de la fortune*）でしかない。アウグスティヌスにとって、そのような生涯は「大きな悲惨 *magna miseria / grande misère*」にほかならない。

以上の三点は、パスカルの考えに完全に一致し、それに神学的な裏付けを与えている。

ものにする。「希望」がすでに現在を享受するための最善の行為であり、人間が現在において得られる最高の善そのものなのである。またそれは、すでにして来世という純然たる霊的な善の一部でもある。だからこそ、パスカルはロアネーズ嬢にこう語る。

[21] Le présent est le seul temps qui est véritablement à nous, et dont nous devons user selon Dieu. C'est là où nos pensées doivent être principalement comptées. (Lettre 8 à Mlle de Roannez, janvier 1657, *MES*, III, p. 1044)

本当に私たちのものである時間は現在だけですし、神に従って私たちが用いるべきなのも現在だけなのです。われわれの思索の中心は、現在にこそ向けられるべきなのです。

これは、神への祈りを通して来世の希望を確固たるものにしようという誘いにほからならない。

フェルティエールの辞書は、「希望 *espérance*」について、「対神徳の一つで、それによってわれわれは、神が一部の選ばれた者たちに約束した恩恵、すなわち永遠の至福を待ち望む」 (*Vertu Theologale par laquelle nous attendons la recompense que Dieu a promise à ses esleus, la beatitude éternelle*) と説明している。これは、言うまでもなく「絶望 *désespoir*」と反対の状態である。アカデミーの辞書 1694 年版によると、「絶望」とは、「人間がおのれの救い、神の慈悲について絶望するという罪のこと」 (*Ce peché par lequel un homme desespere de son salut, de la misericorde de Dieu*) である。「希望」は「徳」であり、「絶望」は「罪」である。ロラン・ティルアンが教えるように、「絶望 *désespoir*」という語は、17 世紀において「自殺」を含意していた¹⁸。「希望」を失ったものは、文字通り絶望し、生を放棄するのである¹⁹。

[22] ESPERANCE

s. f. Vertu Theologale par laquelle nous attendons la recompense que Dieu a promise à ses esleus, la beatitude éternelle. Quelque pecheur qu'on soit, on doit vivre dans l'esperance que Dieu fera misericorde. La croix est nostre unique esperance.
(Antoine Furetière, *Dictionnaire universel*, 1690)

[23] DESESPOIR

s. m. Abattement de l'ame, qui ne croit pas pouvoir surmonter un mal qui la presse. Tomber dans le desespoir. il est dans le dernier desespoir.

¹⁸ suicide という語の登場は 18 世紀である。Laurent Thirouin, « Le pari au départ de l'apologie », dans *Pascal ou le défaut de la méthode. Lecture des Pensées selon leur ordre*, Paris, Honoré Champion, 2015, p. 188. なお、L. ティルアンはこの論文で、S680-L418 の « Cela ôte tout parti » (「そのこと [賭けの条件] は [「神あり」に賭ける以外の] すべての選択を無効にしてしまう」) という一文を手がかりに、パスカルの「賭け」の重点は、参加料としてのおのれの生涯を差し出す miser 行為そのものよりも、(自分のわずかな「分け前 *parti*」を保持するために) 途中でゲームを降りないことにありと解釈した上で (ティルアンによると *parti* は「選択」と「分け前」の掛詞)、そのことはまさに、「希望」をもち続けること、すなわち「絶望」しないことを意味すると説いている。「希望」と「絶望」の対比について、S451-L908 を参照。

¹⁹ パスカルは、小品『要約イエス=キリストの生涯』のなかで、イエスの臨終の言葉「わが神、わが神、何ゆえ私をお見捨てになったのですか」を、絶望ではなく希望の言葉であると強調している。「これらの言葉は、希望に満ちたものであり、絶望に満ちたものではない。なぜなら彼は「わが神、わが神」と叫んでいるからだ。神は死者たちの神でも、絶望者たちの神でもないのである」 (*Abrégé de la vie de Jésus-Christ*, *MES*, III, p. 299)。

Il signifie aussi, Ce peché par lequel un homme desesperé de son salut, de la misericorde de Dieu. Le desespoir est un peché contre le saint Esprit.
(*Dictionnaire de l'Académie française*, 1^{re} édition, 1694)

なお、未来への「希望」を抱く者が過ごす現在が、「気晴らし」を生きる人間が過ごす現在と質的に異なるものであることは、もはや言うまでもないだろう。前に見たように、「気晴らし」にふける者は、未来の目的を設定しながらも、そこに至る手段としての現在の活動自体に享樂を見出すが、その享樂は長続きせず、やがて倦怠が訪れるため、次はもっと刺激の強い活動（「騒ぎ」）に取り組まざるをえない。こうして、「気晴らし」は主体を決して充足させることはない。次の文中の、現在を蔑ろにし、つねに未来に幸福を先送りすることで、いつまでも不幸なままにとどまる「われわれ」とは、まさに気晴らしに興じる人間のことである²⁰。

[24] Que chacun examine ses pensées, il les trouvera toutes occupées au passé ou à l'avenir. Nous ne pensons presque point au présent, et si nous y pensons, ce n'est que pour en prendre la lumière pour disposer de l'avenir. Le présent n'est jamais notre fin. Le passé et le présent sont nos moyens, le seul avenir est notre fin. Ainsi nous ne vivons jamais, mais nous espérons de vivre, et nous disposant toujours à être heureux, il est inévitable que nous ne le soyons jamais. (S80-L47)

各人が自分の思考をじっくりと検討してみれば、そのすべてが過去と未来で占められていることを知るだろう。われわれは現在のことなど、ほとんど考えはしない。 考えるとしても、未来を思いどおりにするためになんらかの光を得るためでしかない。現在は決してわれわれの目的ではない。過去と現在はわれわれの手段であって、ただ未来だけがわれわれの目的なのだ。こうして、われわれは決して生きていない。生きようと望んでいるだけである。いつも幸福でいようと努めながらも、決して幸福になれないが、それは避けられないことなのだ。

²⁰ アウグスティヌスは『告白』第11巻で、「分散 *distensio*」と「緊張 *intentio*」という二つの時間のあり方に言及している。塩川徹也氏の説明を借りれば、「分散」とは「放心 *dissipation*」ないしは「注意散漫 *dissipation d'esprit*」さらには「気晴らし」のことであり、精神を過去にも未来にも分散させる生き方である。他方、「緊張」とは、精神の安定的な集中であり、過去も未来も自己のうちへと集め、抱え込むことで、精神の現在に集中する時間を作り出す生き方である。アウグスティヌスによれば、後者の生き方によって人間は、神を「未来も過去も知らない、えも言われぬ喜びのうちに見いだす」という。「その喜びは不変であり、つねに現前しているからだ」と。人間にこのような二つの対極的な時間の過ごし方を認めるなら、パスカルにとって、神とともにあり「来世の希望」を手にした者は「緊張」の時間を、信仰をもたず「気晴らし」に興じる者は「分散」の時間を生きていると言えるだろう。なお、塩川氏は、S80-L47に描かれているのは、「神なき人間」（すなわち「分散」を生きる者）の時間意識であると解釈している。これは、アダムとエヴァが享受した原初の快樂、すなわち、いまこの時の快樂を直接享受することへのノスタルジーであり、原罪による墮落以降、いかなる人間にも到達することができない幸福への憧憬にほかならない。T. Shiokawa, « Le temps et l'éternité », dans *Entre foi et raison : l'autorité. Études pascaliennes*, Paris, Champion, 2012, p. 91-104 (日本語版：塩川徹也『発見術としての学問 モンテーニュ、デカルト、パスカル』岩波書店、2010年、第五章「ひとは今を生きることができるか パスカルの時間論」155-183頁)。

モンテーニュ

モンテーニュは、セネカの句「愚か者の人生は不快で不安定で、未来のことばかりを考えている」を引用しながら、未来への関心が現在の享受を妨げることに對して警告している²¹。

[25] *Stulti uita ingrata est, trepida est, tota in futurum fertur.* [Sénèque, *Lettres à Lucilius*, XX, 10] (III, 13, « De l'expérience », *BMM* 1162, *VS* 1111)

愚か者の人生は不快で不安定で、未来のことばかりを考えている。

そして、パスカルもまた、現在を享受することを理想の生き方とみなしている。しかしながら、すでに見たように、モンテーニュは、来世への希望をこの世の最大の幸福とみなすパスカルとは異なり、熱烈な信仰をもって永遠の至福を探求する人々とは明確に一線を画している²²。次の一節は、そのような敬虔な人々を、未来への関心のゆえに現在を正しく享受しない者の典型と位置づけて批判の目を向けている。死後に思いを向けることを、現存するものを認識する行為からの逃避であると位置づけるのだ。

[26] *Nous ne sommes jamais chez nous, nous sommes tousjours au delà. La crainte, le desir, l'esperance, nous eslancent vers l'advenir : et nous desrobent le sentiment et la consideration de ce qui est, pour amuser à ce qui sera, voire quand nous ne serons plus.* (I, 3, « Nos affections s'emportent au delà de nous », *BMM* 38, *VS* 15)

われわれは決して自分のもとにおらず、つねにその彼方にいる。恐れ、欲望、希望がわれわれを未来へと飛翔させ、われわれが今あるものを感じ、見つめるのを妨げる。そうしてわれわれは、来るべきこと、さらにはわれわれの死後へと気をそらせてしまうのだ。

²¹ « *Stulti uita ingrata est, trepida est, tota in futurum fertur.* Je me compose pourtant à la perdre sans regret : Mais comme perdable de sa condition, non comme moleste et importune. Aussi ne sied-il proprement bien, de ne se desplaire à mourir qu'à ceux, qui se plaisent à vivre. Il y a du mesnage à la jouyr : je la jouis au double des autres : Car la mesure en la jouissance, depend du plus ou moins d'application, que nous y prestons. Principalement à cette heure, que j'apperçoy la mienne si briefve en temps, je la veux estendre en poix : Je veux arrester la promptitude de sa fuite par la promptitude de ma saisie : et par la vigueur de l'usage, compenser la hastiveté de son escoulement. À mesure que la possession du vivre est plus courte, il me la faut rendre plus profonde, et plus pleine. Les autres sentent la douceur d'un contentement, et de la prosperité : je la sens ainsi qu'eux : mais ce n'est pas en passant et glissant. Si la faut-il estudier, savourer et ruminer, pour en rendre graces condignes à celui qui nous l'ottroye. » (III, 13, « De l'expérience », *BMM* 1162, *VS* 1111-1112)

²² Cf. « Je ne touche pas icy, et ne mesle point à ceste marmaille d'hommes que nous sommes, et à ceste vanité de desirs et cogitations, qui nous divertissent, ces ames venerables, eslevées par ardeur de devotion et religion, à une constante et conscientieuse meditation des choses divines, lesquelles, preoccupans par l'effort d'une vive et vehemente esperance, l'usage de la nourriture eternelle, but final, et dernier arrest des Chrestiens desirs : seul plaisir constant, incorruptible : desdaignent de s'attendre à nos necessiteuses commoditez, fluides et ambiguës : et resignent facilement au corps, le soin et l'usage, de la pasture sensuelle et temporelle. C'est un estude privilegé. Entre nous, ce sont choses, que j'ay tousjours veues de singulier accord : les opinions supercelestes, et les mœurs sousterraines. » (III, 13, *BMM* 1165-1166, *VS* 1114-1115) (下線部には、アウグスティヌス『神の国』XIX, 20からの影響が認められる。引用 19 および注 17 参照)。

なお、『エピクテトスとモンテーニュについてのサシ氏との対話』で、パスカルはモンテーニュが尊重する「徳」について次のように語っている。「La sienne [= *sa vertu*] est naïve, familière, plaisante, enjouée, et pour ainsi dire folâtre. Elle suit ce qui la charme, et badine négligemment des acidents bons et mauvais, couchée mollement dans le sein d'une oisiveté tranquille, d'où elle montre aux hommes, qui cherchent la félicité avec tant de peine, que c'est là seulement où elle repose, et que l'ignorance et l'incuriosité sont deux doux oreillers pour une tête bien faite, comme il dit lui-même. » (*Entretien*, p. 121-122)

ここでモンテーニュが、現在（「今あるもの *ce qui est*」）を享受する行為を「感じ、見つめること *le sentiment et la consideration*」と表現していることには、とくに注意する必要がある。これらはいずれも身体を通じた認識のことである（*considérer* は「見る」ことだ « *S’attacher à regarder avec attention, à examiner quelque chose* »²³）。モンテーニュは、現に知覚できない観念的な幸福（「希望」）に陶醉することはない。そのことは、引用 27 からもうかがえる。

モンテーニュは引用 27 で、「自分の幸運を無気力無関心に受け取っている人々 *ceux cy [...]* *qui reçoivent si laschement, et incurieusement leur bonne fortune*」を、「希望の奴隷となる *servir à l’esperance*」人々と断じている²⁴。彼によればそれは、「現在という今自分が保有している時を飛び出す」態度である。つまり、現在を心身を駆使して十全に享受する態度ではないということだ。未来への「希望」とは彼にとって、「想像 *fantasie*」がもたらす「幻影や空想 *des ombrages et vaines images*」でしかなく、感覚をもって知覚する対象ではないため、幸福の源泉とはなりえないのである²⁵。

[27] *Ainsi je me propose en mille visages, ceux que la fortune, ou que leur propre erreur emporte et tempeste. Et encores ceux cy plus pres de moy, qui reçoivent si laschement, et incurieusement leur bonne fortune. Ce sont gens qui passent voirement leur temps ; ils outrepassent le present, et ce qu’ils possèdent, pour servir à l’esperance, et pour des ombrages et vaines images, que la fantasie leur met au devant [...].* (III, 13, *BMM* 1163, *VS* 1112)

それゆえ私は、運命やおのれの失敗によって混乱の渦中にある人々や、さらには、いっそう私に近く、自分の幸運を無気力無関心に受け取っている人々のさまざまな顔を思い浮かべる。この連中こそまさに、自分の「時をやり過ごし *passer le temps*」、現在という今自分が保有している時を飛び出して、希望の奴隷となり、想像が自分の目の前に呈示する幻影や空想を追いかけている人々である²⁶。

²³ Furetière, *op. cit.*, s. v. « *considerer* ».

²⁴ 彼がそのような人々を「自分に似て」*plus pres de moy* と形容していることから、自覚していてもそのような姿勢を回避することが困難であることが示唆されている。

²⁵ もっともモンテーニュは、上の一節に続けて「その幻影は、追えば追うほど足早に、遠くに逃げていく。彼らの追求の成果と目的は、追求そのものにある。ちょうどアレクサンドロスが、自分の仕事の目的は仕事そのもののだと言ったように *lesquelles hastent et allongent leur fuite, à mesme qu’on les suit. Le fruit et but de leur poursuite, c’est poursuivre : comme Alexandre disoit que la fin de son travail, c’estoit travailler*」(III, 13, *BMM* 1163, *VS* 1112) と記している。何かを目的とする手段が自己目的化するさまを批判する姿勢それ自体は、パスカルにそのまま受け継がれているのが興味深い。なお、このアレクサンドロス王の逸話は、モンテーニュが別の箇所で言及しているエペイロスの王ピュロスの逸話を想起させる。ピュロスが自分は今後徐々に領地を広げ世界を支配下に治めてからゆっくりと休むと語ったところ、家臣のキュネアスは、「そんなに苦勞せずとも、直ちに休まれてはどうか」と忠言したという話である (« *Pour Dieu, Sire, rechargea lors Cyneas, dictes moy, à quoy il tient que vous ne soyez dés à présent, si vous voulez, en cet estat ? Pourquoi ne vous logez vous dès cette heure, où vous dictes aspirer, et vous espargnez tant de travail et de hazard, que vous jetez entre deux ?* » I, 42, « *De l’inegalité qui est entre nous* », *BMM* 289, *VS* 267)。パスカルも『エッセー』を通じてこの話を知り、S168-L136 のなかで言及している (« *Le conseil qu’on donnait à Pyrrhus de prendre le repos qu’il allait chercher par tant de fatigues, recevait bien des difficultés.* »)。

²⁶ 先に見たように、アウグスティヌスは「希望」を身体ではなく精神によって味わう善とみなし、現世において先取りできる来世の霊的な善との類似を見いだしていた。パスカルに受け継がれたと思われるそのような見地を、モンテーニュは真っ向から否定している。このとき、『神の国』の当の一節（引用 19）を、モンテーニュが意識していた可能性はある。

モンテーニュは、おそらく来世の存在を否定するわけではないが、それを当てにして生きるのを拒否する²⁷。短い生涯の間に得られるだけの享樂を、精神のみならず身体でも味わうように努めるのである。モンテーニュの神は、限られた者に魂の永遠の至福を与える存在ではなく、（動物を含め）生きとし生けるものにこの世において喜びを味わうことを許す存在である。その寛大な存在に彼は、「自然」という別名を与えている。

[28] J'accepte de bon coeur et reconnaissant, ce que nature a fait pour moy : et m'en agrée et m'en loue. [...] tout bon, il a fait tout bon. (III, 13, *BMM* 1163-1164, *VS* 1113)

私は、自然が私のために作ってくれたものを、心をこめて、感謝して受け取り、喜び、満足する。[...] 彼は善なる存在である以上、彼が作ったものも完全なる善である。

短く結論を述べる。モンテーニュに反し、パスカルは現世の享樂ではなく来世の至福を得るためにメメント・モリを勧め、「気晴らし」を人間の最大の不幸とみなし、来世への希望こそが現世の最大の幸福であると説いた。パスカルはこのように、死と来世について述べる際に、モンテーニュの主張とことごとく対立する命題を論証しようと努めているように見える。似通った語彙も多く、まるでパスカルがモンテーニュに応答しているように感じられる。実際、『パンセ』で護教論者の対話相手として登場する不信仰者の少なくとも一部は、明らかにモンテーニュをモデルにしている。パスカルは説得する相手として、死後の救済に関心を示さず、「だらしなくふんわりと死ぬ」ことで満足するモンテーニュのような人物を想定していたのではないか。

パスカル自身が称賛を口にするように²⁸、『エッセー』には読者を魅了する魔力がある。ときに異教的な考えを述べる彼は、パスカルには危険な論敵に見えたことだろう。J・メナールは、「パスカルにおいて、モンテーニュは称賛の対象であると同時に積極的な攻撃の対象である」と書いた²⁹。パスカルはこの論敵の文章に学ぶことで、まさにその相手に挑戦する論述を作り上げようと試みたのである。

²⁷ モンテーニュは、II, 12「レーモン・スボンの弁護」において、霊魂不滅に関する哲学の諸説を並べ、それをすべて根拠薄弱なものとして退け、人間の理性の無力さ、哲学者の傲慢さを批判する。その上で、霊魂不滅は神が信仰によってわれわれに与える神聖な真理であると結論づける。「*Mais pour reprendre mon propos : c'estoit vrayment bien raison, que nous fussions tenus à Dieu seul, et au benefice de sa grace, de la verité d'une si noble creance, puis que de sa seule liberalité, nous recevons le fruit de l'immortalité, lequel consiste en la jouissance de la beatitude eternelle. Confessons ingenuement, que Dieu seul nous l'a dict, et la foy : Car leçon n'est-ce pas de nature et de nostre raison. Et qui retentera son estre et ses forces, et dedans et dehors, sans ce privilege divin : qui verra l'homme, sans le flatter, il n'y verra ny efficace, ny faculté, qui sente autre chose que la mort et la terre. Plus nous donnons, et devons, et rendons à Dieu, nous en faisons d'autant plus chrestienement.* » (II, 12, *BMM* 586, *VS* 554).

²⁸ « La manière d'écrire d'Épictète, de Montaigne et de Salomon de Tultie, est la plus d'usage, qui s'insinue le mieux, qui demeure plus dans la mémoire et qui se fait le plus citer, parce qu'elle est toute composée de pensées nées sur les entretiens ordinaires de la vie [...]. » (S618-L745)

« Tous ceux qui disent les mêmes choses ne les possèdent pas de la même sorte ; et c'est pourquoi l'incomparable auteur de l'Art de conférer s'arrête avec tant de soin à faire entendre qu'il ne faut pas juger de la capacité d'un homme par l'excellence d'un bon mot qu'on lui entend dire ; mais, au lieu d'étendre l'admiration d'un bon discours à la personne, qu'on pénètre, dit-il, l'esprit d'où il sort ; qu'on tente s'il le tient de sa mémoire ou d'un heureux hasard [...]. » (*De l'art de persuader*, *MES*, III, p. 423)

²⁹ « Chez Pascal, Montaigne est spontanément combattu en même temps qu'admiré. La pensée de Pascal, parvenue à son expression la plus personnelle, se trouve à bien des égards en contradiction avec le texte de Montaigne qui l'a suscitée. N'est-ce pas là paradoxe ? » (Jean Mesnard, « De la 'diversion' au 'divertissement' »,

	モンテーニュ	パスカル
メメント・モリ	死を軽視してこの世の生をより平穩に過ごすことを推奨。	おのれの生が有限であるという悲惨な境遇から目を背けず、死後の幸福な生の可能性の探究に乗り出す。
気晴らし	「気をそらすこと」を悲しみや苦悩を乗り越える暫定的だが有効な手段とみなす。	些細な「気晴らし」によって慰められるという点にこそ人間の最大の不幸があると警告。
来世への希望	来世の至福に与るための敬虔な努力を「希望への隷従」であるとして斥け、この世の悦楽を神からの恵みとして精神と身体で十全に味わうと宣言。	未来の救済に対する「希望」をもって信心に励むことが、現在を充実させ、この世の生涯を最も幸福なものにする主張。

引用凡例

- ・引用の出典は、下記の略号によって示す。

FS : PASCAL, *Les Provinciales, Pensées et opuscules divers*, textes édités par Gérard FERREYOLLES et Philippe SELLIER, Paris : Librairie Générale Française, « La Pochothèque », 2004.

MES : PASCAL, *Œuvres complètes*, tomes I-IV, éd. Jean MESNARD, Paris, Desclée de Brouwer, 1964-1992.

Entretien : PASCAL, *Entretien avec M. de Sacy*, texte établi, présenté et annoté par Pascale MENGOTTI-THOUVENIN et Jean MESNARD, Paris, Desclée de Brouwer, « Les Carnets DDB », 1994.

BMM : MONTAINGE, *Essais*, édition établie par Jean BALSAMO, Michel MAGNIEN et Catherine MAGNIEN-SIMONIN, Paris : Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2007.

VS : MONTAIGNE, *Essais*, édition de Pierre VILLEY, sous la direction et avec une préface de Verdun-Louis SAULNIER, Paris : PUF, « Quadrige », 1992, 3 vol.

(<https://www.lib.uchicago.edu/efts/ARTFL/projects/montaigne/>)

- ・『パンセ』のテキストは *FS* に従い、断章番号を記号 S とともに示し、ラフュマ版 (L) の断章番号を付記する。長い断章の場合、*FS* における頁番号も記す。
- ・『エッセー』のテキストは *BMM* に従い、*VS* の当該頁も付記する。両版で章番号が異なる場合は両方を示す。章題は初出の際にのみ原語で示す。
- ・引用文中のイタリック (訳文中の傍点) による強調は、すべて引用者による。

参考文献

AUGUSTIN, saint, *La Cité de Dieu*, livres XIX-XXII, *Œuvres de saint Augustin*, tome 37, Paris, Desclée de Brouwer, Bibliothèque augustinienne, 1960.

BRUNSCHVICG, Léon, *Descartes et Pascal lecteurs de Montaigne* [1942-1945], Paris, Agora, « Pocket », 1995.

CARDARONE, Rosaria, « Du mouvement et de l'immobilité. Montaigne, Pascal et la question de la vie », *Montaigne Studies An Interdisciplinary Forum*, n° 33, 2021, *Montaigne et Pascal*, p. 27-37.

CARRAUD, Vincent, *Pascal et la philosophie*, Paris, PUF, 1992, p. 287-315.

CROQUETTE, Bernard, *Pascal et Montaigne, Étude des réminiscences des Essais dans l'œuvre de Pascal*, Genève, Droz, 1974.

DESCOTES, Dominique et PROUST, Gilles, *L'Édition électronique des Pensées de Pascal*, créée en 2011 : <http://www.penseesdepascal.fr>

Dictionnaire de l'Académie française, 1694.

Dictionnaire de Michel de Montaigne, sous la direction de Ph. Desan, Paris, Champion, 2004 ; Paris, Classiques Garnier, « Classiques jaunes », 2018, art. « Mort » (C. Blum).

dans *La Culture du XVII^e siècle. Enquêtes & synthèses*, Paris, PUF, 1992, p. 67-73)

- FERREYROLLES, Gérard, « Mourir avec Pascal », dans *De Pascal à Bossuet. La littérature entre théologie et anthropologie*, Paris, Honoré Champion, 2020, p. 97-113.
- FRIEDRICH, Hugo, *Montaigne*, traduit de l'allemand par Robert Rovini, Paris, Gallimard, « Bibliothèque des Idées », 1968 ; « Tel », 1984, chapitre VI : « Montaigne et la mort », p. 271-315.
- FRIGO, Alberto, « Du repentir et de sa possibilité : Montaigne et Pascal », *Montaigne Studies An Interdisciplinary Forum*, n° 33, 2021, *Montaigne et Pascal*, p. 59-80.
- FURETIÈRE, Antoine, *Dictionnaire universel*, 1690.
- KUBOTA, Takeshi, *Montaigne lecteur de la Cité de Dieu d'Augustin*, Paris, Honoré Champion, 2019.
- LYRAUD, Pierre, *La Fin et le passage. Figures de la finitude chez Pascal*, Paris, Honoré Champion, 2022.
- 前田陽一『モンテーニュとパスカルとのキリスト教弁証論』東京創元社、1989年。
- MARTINET, Jean-Luc, *Montaigne et la dignité humaine. Contribution à une histoire du discours de la dignité humaine*, Paris, Eurédit, 2007.
- MESNARD, Jean, « De la "diversion" au "divertissement" », dans *La Culture du XVII^e siècle. Enquêtes & synthèses*, Paris, PUF, 1992, p. 67-73.
- , « Montaigne maître à écrire de Pascal », *La Culture du XVII^e siècle. Enquêtes & synthèses*, Paris, PUF, 1992, p. 74-94.
- MONTAIGNE, Michel de, *Les Essais*, adaptation en français moderne par André Lanly, Paris, Gallimard, « Quarto », 2009.
- SCREECH, Michael, A, *Montaigne and Melancholy. The Wisdom of the Essays* [1983], New Edition, Lanham-Boulder-New York, Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2000.
- SELLIER, Philippe, *Pascal et saint Augustin*, Paris, Armand Colin, 1970 ; Paris, Albin Michel, « L'Évolution de l'Humanité », 1995.
- SHIOKAWA, Tetsuya, « Le temps et l'éternité », dans *Entre foi et raison : l'autorité. Études pascaliennes*, Paris, Honoré Champion, 2012, p. 91-104.
- 塩川徹也『発見術としての学問 モンテーニュ、デカルト、パスカル』岩波書店、2010年、第五章「ひとと今を生きることができるか パスカルの時間論」155-183頁。
- SUSINI, Laurent, « Pascal, Montaigne et la Bible. Un faux pastiche peut en cacher un vrai », *Littératures classiques*, n° 74, 2011/1, p. 91-106.
- THIROUIN, Laurent, « Montaigne, "demi-habile" ? Fonction du recours à Montaigne dans les *Pensées* », dans *Pascal ou le défaut de la méthode. Lecture des Pensées selon leur ordre*, Paris, Honoré Champion, 2015, p. 157-175.
- , « Le pari au départ de l'apologie », dans *Pascal ou le défaut de la méthode. Lecture des Pensées selon leur ordre*, Paris, Honoré Champion, 2015, p. 177-191.
- YAMAJO, Hirotsugu, *Pascal et la vie terrestre. épistémologie, ontologie et axiologie du « corps » dans son apologétique*, *Memoirs of the Graduate School of Letters, Osaka University*, vol. LII-II, mars 2012.
- , « La dignité de l'homme selon Pascal », *Gallia*, n° 50, Société de langue et littérature de l'Université d'Osaka, mars 2011, p. 13-22.

付記：本稿は JSPS 科研費 21K00416 による研究成果の一部である。